



COLUMN

投資環境資料

社団法人ロシアNIS貿易会・ロシアNIS経済研究所 次長

服部 倫卓

2010年の鉱工業生産に見るロシアの経済動向

2010年は8.2%増

ロシア連邦国家統計局が、2010年のロシアの鉱工業生産実績を発表しましたので、今回はこれにもとづいて最新のロシアの経済動向を探ってみたいと思います。

ロシアの鉱工業生産は、2008年暮れから2009年初頭にかけて激しく落ち込みましたが、それ以降は一貫して回復傾向にあります。2009年の生産が前年比実質9.3%減であったのに対し、2010年には同8.2%増となりました。月別に見ると、2010年12月の時点で、2008年の月平均生産水準を、わずかに上回りました。全体として、ロシアの鉱工業生産は、リーマンショック以降の苦境をひとまず乗り切ったと考えていいでしょう。

産業部門別・地域別の動向

産業部門別に見ると、金融・経済危機の影響で2009年の落ち込みが大きかった部門ほど、その反動で2010年の伸び率が大きいという傾向が目立ちます。そのことは機械部門に顕著であり、自動車をはじめとする「輸送機器」は2009年が37.2%減、2010年が32.2%増でした。同様に、「電気・電子機器、光学機器」は2009年が32.2%減、2010年が22.8%増、「機械・設備」は2009年が31.5%減、2010年が12.2%増でした。「冶金、完成金属製品」も、2009年が14.7%減、2010年が12.4%増となっています。その一方で、ロシアの基幹産業である「鉱業」は、2009年の落ち込みが0.6%と軽微だった分、2010年の伸びも3.6%にとどまっています。

2010年の乗用車生産は、前年比ほぼ2倍増の121万台でした。純国産ブランド車も、現地生産されている外国ブランド車も、ともに生産を拡大しましたが、伸び率がより大きかったのは後者の模様で、2010年も外国車へのシフトはじわりと進んだようです。

ロシアの浮沈を握るエネルギー部門に着目すると、まず2010年の原油の生産は前年比2.1%増の5億500万トンであり、やや地味な伸びにとどまっています。天然ガスは前年比12.1%増の5,910億立方メートルと大きく伸びましたが、これは前年にヨーロッパ市場の低迷から減産したことの反動という側面が大きいと思われる。

地域別の鉱工業生産動向も、上述のようなトレンドに見合ったものになっています。ロシアは全国8つの「連邦管区」に分かれています。2010年に鉱工業生産が最も伸びたのは、自動車産業の集積地帯である沿ヴォルガ連邦管区でした(13.5%増)。逆に、主力の石油産地となっているウラル連邦管区は、最も低い6.6%増にとどまりました。

ちなみに、より細かく、州の単位で見ると、一番伸びが目立ったのはカルーガ州の44.7%増でした。同州では、フォルクスワーゲン、PSAプジョー・シトロエン、そして三菱自動車といった外資が乗用車を現地生産しています。

■レポートの作成・配信は

ドイチェ・アセット・マネジメント株式会社

当資料は、情報提供を目的として作成した参考資料であり、特定の投資商品の推奨や投資勧誘を目的としたものではありません。当資料は、当社が信頼できるとされる情報に基づいて作成しておりますが、その正確性及び完全性を保証するものではありません。当資料中の第三者のコメントは著作個人の見解であり当社の運用方針等とは関係無く、また、その内容について当社が責任を負うものではありません。当資料の市場見通し及び金融指標等に関する予測値について、当社が将来の結果を保証するものではなく、また将来予告なく変更されることがあります。当資料中のいかなる情報も将来の投資成果を示唆あるいは保証するものではありません。当資料に記載されている個別の銘柄・企業名については、あくまで参考として述べたものであり、その銘柄または企業の株式の売買を推奨するものではありません。当資料に関する著作権は情報提供元のクレジット記載があるものを除きすべてドイチェ・アセット・マネジメント株式会社に属しますので、当社に無断で資料の複製、転用等を行うことはできません。D-110308-9